

孔雀明王像

絹本着色

鎌倉時代

(図版 2 31)

孔雀明王の画像としては、北宋の仁和寺本、平安後期の東京国立博物館本(以下東博本と略称)を始めとする名品がいくつか伝えられている。ここに紹介する個人蔵本は、鎌倉前期を降らない制作と思われるもので、保存状態もよく作行もすぐれており、絵画史研究の一助になる作例と考える。⁽¹⁾

一

孔雀明王像は、天変・兵禍・鬼害・病魔などの一切の災難を払う孔雀経法の本尊として懸用された。日本では空海が仁王経・守護経などととともに、仏母明王経(孔雀経)を護国經典として取り上げたことから重要度が加わり、東寺長者や仁和寺歴代門跡などの高僧が手掛けるべき秘法として喧伝された。とくに広沢流(御室仁和寺)では「無双の大秘法」(守覚撰『追記』)とされ、その具体的効能として祈雨・攘災天変・治病・産生などが謳われるに至ったのである。

こうした事情から、仁和寺と画像との結び付きは、とりわけ深かったことが記録の上でも確かめられる。藤原道長が末画と思われる孔雀明王画像を仁和寺濟信に奉ったことや(覚印撰『勝語集』⁽²⁾、空海

相伝の画像および空海自筆の『孔雀経』が修法に用いられていたことなどである。⁽³⁾ なかでも、後者すなわち空海相伝の画像と經典は、仁平三年(一一五三)八月の覚法法親王の起請文起草を期として門外不出扱いとなった。(挿図一)その背景について、これまで必ずしも明らかでなかったので、新たな知見を加えながら前後の経緯をたどっておこう。

覚法の起請文(「孔雀明王同経壇具等相承起請文」第一通)の趣旨は、昔門徒の中に件の仏経つまり空海相伝の画像と經典を喜多院(北院)から持ち出した者があるといい、その前例をもってこれを持ち出さんとする申請があるが、爾今以後これを禁ずる、というものである。⁽⁴⁾ 寺外への持ち出しに関しては、『東宝記』五に、永保二年(一一〇八)七月東寺長者信寛が東寺で孔雀経法を修した際、雨が降らなかったので、仁和寺宮(性信)に依頼して大師御持経孔雀経を借り、めでたく効験があった、という事例がある。これは門跡の許可による貸出だが、こうした事例がその後何度かあったのだろう。ただ、覚法の起請文起草にはより直接的動機が認められる。それは、仁平三年八月二一日から二八日にかけて禁中にて行われた仁和寺寛暁による孔雀経法である。

『兵範記』同年八月二一日条によれば、近衛天皇の不豫を治癒するため、禁中にて孔雀経法を修する際、仁和寺北院御経蔵の「大師御本尊御経、并に孔雀尾等」を寛暁に渡すべき旨を、鳥羽院から仁和寺五宮(覚性)に申し送ったところ、その仏経は御封と号され開出しがたいという断わりがあった。そこで、やむなく本房(寛暁の房か)の仏経を用いたとされる。一方、覚法の起請文はその直前の八月一九日の日付を持っており、⁽⁵⁾ 明らかに当代門跡として寛暁による持ち

挿図1 孔雀明王同経壇具等相承起請文 第一通 (仁和寺)

出しを忌避する意図があったものと思われる。寛暁の修法は公事であるが、それをも断わる理由は何だったのか。

時の仁和寺門跡覚法(一〇九一―一二五三)は白河天皇の子で、この年の一二月に没する。次の門跡は、同じ皇族とはいっても堀河天皇の子寛暁(一一〇三―一一五九)ではなく、鳥羽天皇の子で覚法の法嗣覚性(一一二九―一一六九)であった。ところが寛暁は覚性より年長であるうえ、すでに前年の仁平二年に護持僧となっており、かなりの力があつたと想定される。老いさき短いと自覚した覚法にとって、ここで大師相伝の仏経の持ち出しと使用を寛暁に対して認めることは、次代の門跡覚性の地位を脅かすことにつながると判断したことは十分に考えられる⁽⁶⁾。そこで寛暁の公事使用を拒否し、これを期して門外不出とするとともに、大師相伝の仏経の扱いを改めて歴代門跡の専権に帰せしめたのではなかったか。覚法起請文末尾の「仏子覚法」の側に「信法」(覚性の別名)の名が連署されているのは、起請文の趣旨が覚法から覚性へ正しく伝えられていたことを示しているよう。この空海相伝の画像および自筆経と称されるものは、道深による「孔雀明王同経壇具等相承起請文」第四通が記された寛元四年(一二四六)までは存在したことがわかるが、それ以後の成行きは不明である⁽⁷⁾。

もちろん空海相伝の画像・経典を用いた孔雀経法が、絶大な権威と信頼を寄せられるものであったにしろ、それは最良のケースであつて、孔雀経法史のすべてではない⁽⁸⁾。造画造像を伴うその他の例をいくつか挙げておくと、仁和寺と並んで頻繁に早くから修法が行われた東寺では、治安三年(一〇三三)一二月に孔雀明王曼荼羅を懸けて読経をした記録がある(『小右記』同年二月一四日条)。通常の孔雀

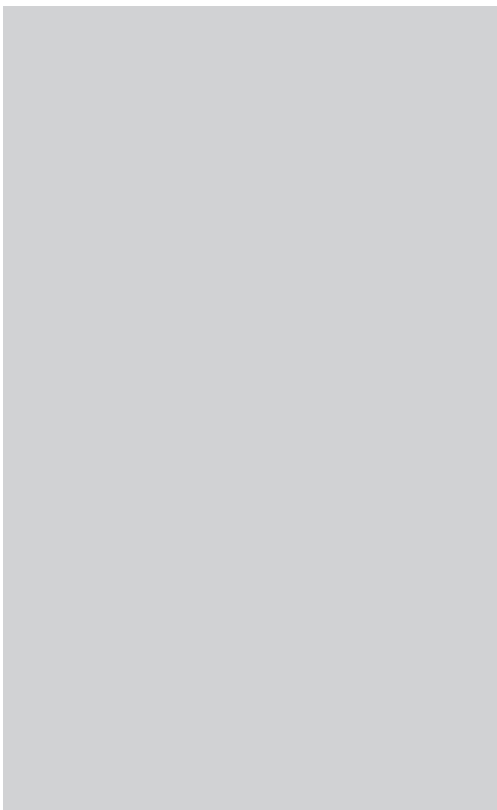
経関係仏事としては独尊像による修法が一般的だった中で（『秘鈔問答』等）、懸曼荼羅制作の確かな例として見過ごせない⁽⁹⁾。また永保元年（一〇八一）大御室性信による弘徽殿での修法は三尺木造の新仏を本尊としたし、『御室相承記』『仁和寺御伝』、元永二年（一一一九）五月成就院寛助による修法は懸仏（画像）のほかにやはり三尺の新仏を壇中に安置するやり方をとった（『仁和寺御伝』）。降って大治四年（一一二九）三月一九日には白河院のために仁和寺宮覚法が孔雀明王および新写経を造進、さらに同年五月二七日には待賢門院の安産祈願のため仁和寺宮の沙汰の下、女院の衣を絵仏師に与えて図絵させた百体の孔雀明王画像が供養されている（『長秋記』）。特に、こうした仁和寺関係の造画造仏では、空海相伝の画像が図像的規範になったであろうことは想像にかたくない。

一一

さて、孔雀明王の図像には二臂・四臂・六臂像などがあるが、日本の絹絵の場合はすべて不空訳『大孔雀明王画像壇場儀軌』の所説に基づいた四臂像になる。その図様は、柳澤氏の分類に従って三つのタイプに分けられる。第一類は東博本・安楽寿院本・松尾寺本・井上家本・智積院本・東京芸大本・聖護院本ほかほとんどのものがこれに入る。第二類は法隆寺本のみ、第三類は柳澤氏が紹介した某家本のみである（注1参照）。ただし、第一類の中に、正面向きの孔雀ながら、翼を法隆寺本のように上にはね上げるものがある。常盤山文庫本や近世の仁和寺本などがそれである。これを第一類乙種としておこう。さて、ここに紹介する作品は、そのうち第一類に相当

し、なかんずく安楽寿院本（挿図2）に酷似する図様をもっている点が注目される。

画像を見てみよう（掛幅装、縦九三・八、横五四・六）。孔雀明王は孔雀の背上の青蓮華座に坐し、頭光身光を負い、広げられた孔雀尾が光背のように体軀を覆う姿に表わされる。肉身は白肉色で朱の暈を施し、細い朱線で描き起こす。肉身部には裏彩色の技法が用いられていると思われる、かなり柔らかい肌合を印象づける。顔は卵形のおだやかな円顔で、眉は墨と群青の二層とするが、上の縁に沿って白線の外暈を加え、微妙にめりはりを効かせている。上眼瞼は墨線でかたどり、眼球に群緑系の色を塗って、下眼瞼を朱線で閉じる。鼻は梁線のない伝統的描法で、鼻孔に墨をさす。唇は朱を平塗りしたのち、合わせ目に焦墨線を入れて引き締めている（挿図3）。白毫は白色に朱の輪郭線。四臂の持物は、右第一手が開敷蓮華茎（花卉は白色系）、第二手が白群または白緑の円形果実（俱緑果）、左第一手が

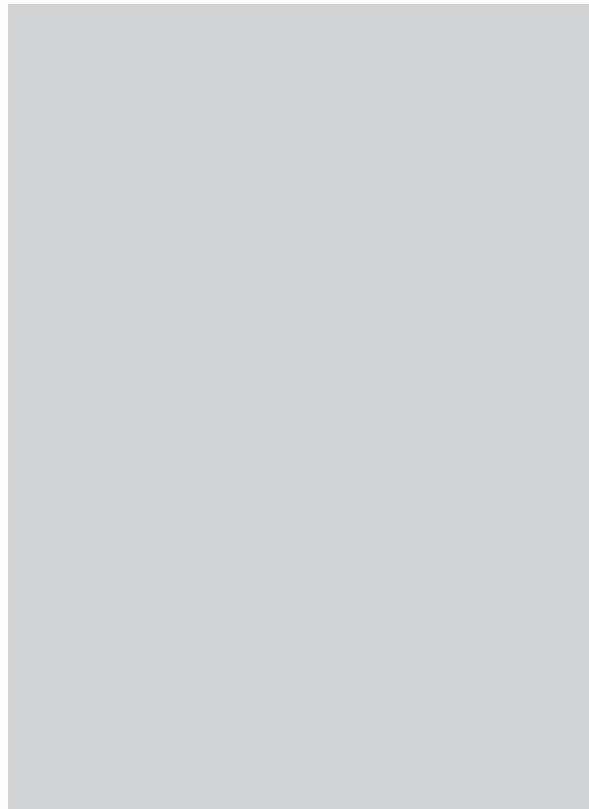


挿図2 孔雀明王像（安楽寿院）

胸前で白緑の円形果実(吉祥果)、第二手が孔雀の羽根(二茎だが眼状斑文四個を伴う)となっている。

着衣部はすべて白地とし、銀泥で文様が描かれ、金泥の輪郭線で仕上げられている。文様は、条帛表に重ね菱形の格子文、裏に変形唐草文、腰衣表に四つ菱入り七宝繋ぎ文、裏に三弁花飾り入り変形格子文、裳の膝部に卍繋ぎ、欄部に菊花入り亀甲繋ぎ文、裾部に雷文繋ぎなどを配している(図版31)。総白地の着衣表現は、『儀軌』に「白繪輕衣を著す」と記されているのに従ったものだろう。

宝冠と装身具には金泥を塗るが、この金泥は補絹の上に乗っている孔雀尾の金泥線と質が似ており、一部後補の疑いがある。宝冠の形状は儀軌類に指定がないせいも、決まった標識がない。東博本では湧雲文繋の円筒形で特に標識めいたものはない。その形状は鎌倉

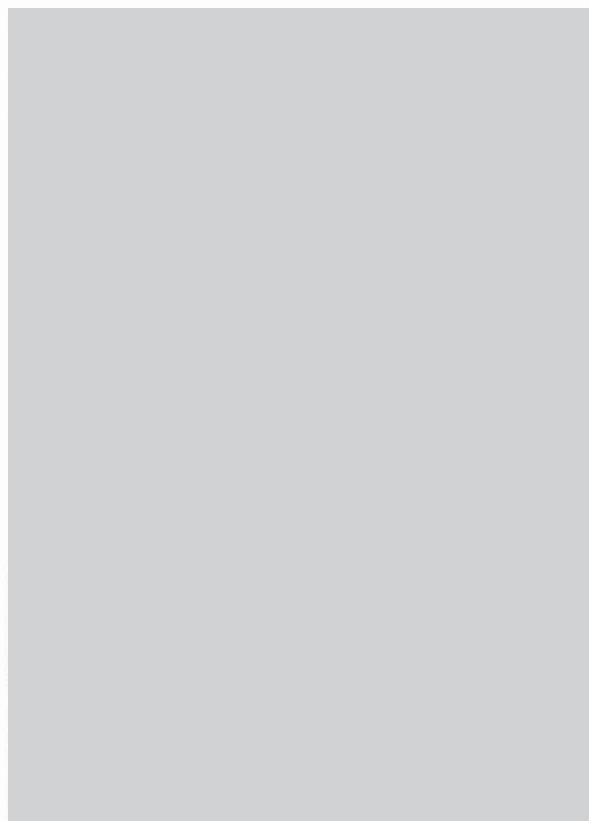


挿図3 孔雀明王像 顔 赤外線写真

後期の智積院本に引き継がれる。安楽寿院本・松尾寺本はやはりおなじタイプだが、これに三個宝珠を加えている。本作品の宝冠は、その形までは変えられていないとすると、松尾寺本の冠にきわめて近い。金泥を彫り塗風に絹表から塗る手法も同じである。ちなみに安楽寿院本では、宝冠・装身具に裏箔を用いており、この点のみは本作品と表現が異なっている。

明王の乗る蓮華台座は『儀軌』の「白蓮華上あるいは青緑花上に結跏趺坐す」に従って群青による青蓮華に表わす。

台座を支える正面向きの孔雀は、図式的ともいえるべき通常の形姿¹⁰で、翼の羽根を白・赤・緑・青の四種に表わす。首の付け根に赤い羽根の小帯があるが、これは安楽寿院本でも同じである。翼は左右を切り詰めた印象を与えるが、両端は縦に長く補絹があり、本来は



挿図4 孔雀明王像 孔雀の足 赤外線写真

もうすこし伸びていたらしい。頭に三茎の小孔雀尾形をのせるものの、ここも補絹が多く当初の形状ははっきりしない。光背形に広がる眼状斑文の孔雀尾も、細かく補絹が入っていて、金泥の毛筋線がその上に引かれるなど、原状を損ねている。うらみがある。ただし、両足は褐色を薄く塗ったのち弾力のある墨線で描き起こされ、当初の練達した筆描をよくとどめている（挿図4）。

四隅の宝瓶の有無は絹が断ち切られているため確認できない。

こうした細かい後補があるにせよ、幸い画像全体の画趣を著しく損ねるようなことはなく、特に顔容部は当初の入念な画技を披瀝している。

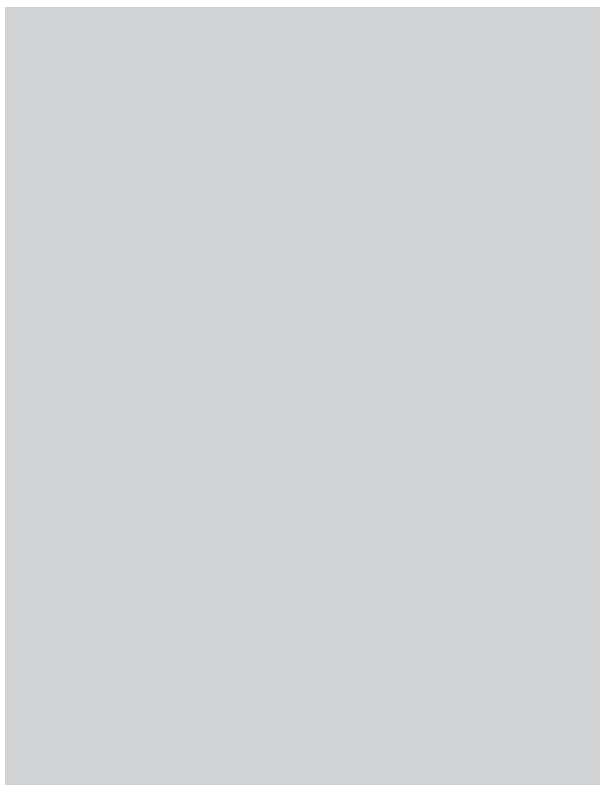
二二

ところで、第一類の画像は、鎌倉時代のもものが四隅に宝瓶を欠く傾向をもつとか、左第二手の孔雀尾の茎の数とかに小異があるものの、ほぼ同じ図像に表わされている。また図像集類に登場する図像は別尊雑記など一部を除いてすべて第一類であることを考えてみても、きわめて強い規範力をもっている図像であったことが明かである⁽¹¹⁾。柳澤氏は第一類の最優品である東博本の図像について、宝冠・臂釧飾り・宝瓶の形式などを取り上げて、空海時代の古い図像の特色を留めていることを指摘し、第一類が多いのも大師様であったためと述べている。筆者も同じ意見であるが、この大師様図像の規範力を示すひとつの材料を提示しておきたい。

それは、左第一手の前膊部に掛かった条帛の形式である。これは肩上で折り返された条帛がその裏を通ってもう一度左腕にかかり、

前に垂れる様子を表わしたものであるが、これが異様に長い。この長さが必然的でないことは第二類、第三類など、その他の遺品の条帛が短くまとめられている点を見ても明らかである。美的に優美であると感じられなくもないが、なにも優美な型が画一的であるはずはない。にもかかわらず、第一類ではその奇妙な型が遵守されてゆくのである。これは図像の規範力ないし権威のせいと考えるほかはない。ちなみに、こうした長い条帛を腕に懸けて流す型は、平安後期以降の仏画では珍しいのに対し、空海が制作に携わった高雄曼荼羅などでは、胎藏中台八葉院の文殊や金剛手院諸尊などにまま見かけるものである（挿図5）⁽¹²⁾。古様な要素とっていいだろうか。

こうした奇妙なまでの規範力は、その図像が大師様であったからこそと思われ、また孔雀経法の秘法性が図像のヴァリエーションの



挿図5 高雄曼荼羅中台八葉院文殊図像

生成を制限する圧力として働いたため、第一類という単一な図像への集中を招いたと考えられる。その大師様は、前節で述べたように仁和寺画像が根本とされたに違いない⁸⁾。ただし、こうした制限下にあっても図像そのものの流伝は、先述したように門外不出になる前の早い機会での根本画像の持ち出しや、仁和寺門跡による寺外での新しい画像供養などの機会を通じて、ほそぼそと行われたと想像される。

最後に本画像の制作年代について考えておこう。

この画像は、図像はもとより、手法や表現にいたるまで鎌倉前期の安楽寿院本(挿図2)に酷似していることは、いうを俟たない。特に着衣に截金を用いず、白地に銀泥の着衣文様、さらに金泥の衣文線という手法は、文様の形の小異を別にすれば驚くほどの類似性を示す。こうした手法は、高山寺の仏眼仏母像や武藤家旧蔵の大日如来像、ポストン美術館の一字金輪像(TI.4030)など、鎌倉初頭から前半にかけての仏画にみかけるものである。着衣文様中の卍繋ぎが平安後期仏画に多い曲線卍ではなく直線卍であることも、時代が鎌倉に入っていることを示す。さらに、顔容描写のやわらかい肌合表現に平安仏画風の趣きを残す一方、目尻のゆるやかな立ち上がりや、上眼瞼の波打ちが入った意志的風貌には、仏眼仏母に通じる鎌倉時代の新様式を認めることができる。ただし、賦彩の温和さには、鎌倉時代もさほど降らない特徴が現われているといっていだらう。このようなことから、本画像の制作年代は一三世紀初め頃に位置づけておきたい。

(泉 武夫)

〈注〉

- 1 孔雀明王画像については、渡辺一「孔雀明王に就いて」(『美術研究』五三号、一九三六年)、神山登「和泉松尾寺の孔雀明王曼荼羅図について」(『仏教美術』一一四号、一九七七年)、柳澤孝「異色ある孔雀明王画像」(『美術研究』三三二号、一九八二年)などの諸論を参照した。
- 2 この画像の顛末については、京都国立博物館における一九八八年六月二〇日の上野記念財団助成研究座談会「仁和寺の仏教美術」での筆者の発表、およびその報告書「研究発表と座談会 仁和寺の仏教美術」(仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第一八冊、一九八九年)を参照されたい。
- 3 注1柳澤論文参照。『長秋記』天承元年(一一三二)八月二日条、および仁和寺文書「孔雀明王同経壇具等相承起請文」第一通仁平三年(一一五三)覚法法親王起請文など。なお『性霊集』巻七によれば、空海は弘仁一二年(八二二)に一丈の仏母明王(孔雀明王)を図絵させている。
- 4 『仁和寺大観』(法蔵館、一九九〇年)中の解説(下坂守)参照。正確には「仁平三月十九日記之」とあり、「三」と「月」の間に「季八」の二文字が挿入されている。
- 6 ちなみに『兵範記』によれば、或人からの伝聞として、五宮(覚性)は覚法からの付属を蒙った後、まだ孔雀経法をしたことがなく、そうした時点で大師相伝の仏経を他人に借与するのは不適當だとして渡さなかったのだという記載がある。
- 7 仁和寺には空海自筆とされる平安前期の『孔雀経』中・下二巻が伝えられているが、これは後代に入ったものようである。
- 8 もちろん最良のケースといえども、仁和寺門跡による孔雀経修法が常に成功していたわけではない。例えば久安元年(一一四五)四月に出現した慧星が六月に入っても消えなかったため、台密の熾盛光法・七仏薬師法と並んで仁和寺法親王覚法も孔雀経法を修したが効験はなかった。頼長は『台記』の中で、弘法・慈覚の両門地に堕ちる世かと慨嘆している(六月二〇日条)。
- 9 孔雀経修法では独尊の本尊のほかに敷曼荼羅を用いることはあっても、懸曼荼羅を用いる記録はきわめて少ない。注1神山論文で紹介された

10 鎌倉時代の懸曼荼羅（松尾寺蔵）の遺品との関連が検討される。現代人の眼からすれば漫画的とも見えるこうした孔雀の図様が、当時のひとにどう見えていたかを示すひとつの材料が、『台記』久安四年（一一四八）条にある。この日、仁和寺法親王覚法が去年に引続き新院に孔雀を献じているが、日記の筆者頼長はそれを見し、その孔雀尾が頗る「画孔雀」に似ると感心している。この「画孔雀」は特に言及がないところをみると、宋画のような写実的表現の花鳥図ではなく、修法の陪席でよく目にしたであろう一般的な孔雀明王画像（例えば東博本のような）の孔雀を指すと思われる。普段見慣れないものに関して、こうした図式的な描写でも十分な形似性を認められたのであるし、それどころか絵画をもとに現実を視るゝ姿勢さえ、ほのめかされているように思われる。

11 そもそも画像集類における孔雀明王の図像そのものが、他の別尊像に較べて圧倒的に数が少ない。六臂像などの記述はあっても図像を欠くところなどは、秘法性が高いことを示している。

12 胎蔵界金剛手院の金剛牢持・忿怒持金剛・虚空無辺超越・大輪菩薩など。

13 参考までに、仁和寺には北宋の画像のほかに、近世の作が三点現存している。いずれも第一類に属し、一点は第一類乙種である。条帛が長いのもちろんである。